新編 浮雲　二葉亭四迷

作者

二葉亭四迷

本名は長谷川辰之助。別号として冷々亭杏雨・四明。尾張藩士・長谷川吉数と志津の嫡子として江戸市ケ谷の同藩上屋敷に生まれる。作家・翻訳者・編集員・大学教授・教頭・商店顧問・間諜・新聞記者・学者・実業家など、様々な職業を転々とした。

江戸、名古屋、松江などで育ち、ロシアの南下政策を憂慮して陸軍士官学校を受験するも三度失敗し、外交官を志望して東京外国語学校でロシア語を学ぶ。そこでロシア文学の魅力を知るが、同校が東京商業学校（現在の一橋大学）に合併されたため、明治十九（一八八六）年に退学、『小説神髄』（明治十八）等で文名を高めていた坪内逍遥の元に出入りし、実相を以て虚相を写すことの重要性を説く『小説総論』を構想、本格的なリアリズム小説の祖であり言文一致体小説の先駆ともなる『浮雲』（明治二十～二十二）を「第一篇」から「第三篇」まで発表した。また、明治二十一（一八八八）年のツルゲーネフ「あひゞき」等の口語訳は、国木田独歩をはじめ、後続者に多大な影響を与えた。

しかし『浮雲』の執筆過程で思想的動揺があり、小説を中絶して内閣官報局に入って、翻訳などの業務に約十年間携った。明治三十二（一八九九）年に東京外国語学校教授に就任したが、日露問題に直接関わっていきたいという志は強く、明治三十五（一九〇二）年にはウラジオストックに渡り実業を視野に入れて活動するも支援者と対立、さらに北京で警察学校の事務長となったがここでも支援者と対立して、日露戦争が勃発する前に帰国した。明治三十七（一九〇四）年、朝日新聞社に入社して久しぶりの小説執筆となる『其面影』（明治三十九）や『平凡』（明治四十）を発表、夏目漱石などとも交流した。明治四十一（一九〇八）年、朝日新聞露都特派員としてペテルブルグに向かったが不眠症に悩まされ肺結核を患い、翌年、日本への帰国中にベンガル湾上で客死した。

出典

本文は『二葉亭四迷全集』第一巻（筑摩書房　昭和五十九）によった。教科書表記の統一による変更のほかは、本文に異同はない。

語句の研究

●一八〇ページ

上19 心附いて　気が付く、考えが回る。正気づく。

キー・ポイント　上19 お勢　文三の下宿先の娘で従姉妹にあたる。母親のお政は、文三が官吏を免職になるまでは二人の結婚を視野に入れており、お勢も学問のできる文三に関心はあった。しかし「第三篇」第十九回の段階では、文三の同僚で処世術にたけた本田昇からの誘いに強く心動かされている。語り手はお勢の性質が「軽躁（かるはずみ）」であることを示している。

キー・ポイント　上20 文三　内海文三。明治十年代に流行した政治小説では登場人物名がその性質や役割を表現していることが多かったが、内海文三・本田昇・お勢・お政といった名前もそれに準ずるか。文三はお勢に想いを寄せてきたが、免職後、下宿での立場を徐々に失っていき、復職の手助けを昇が申し出ても頑なな態度をとり、お勢との関係にも決定的な齟齬が生じてしまっている。

上20 感染れて　影響を強く受ける。

上21 畏縮た　ちぢこまって元気がなくなる。

キー・ポイント　上21 理性　感情に走らず、道理に基づいて考えたり判断したりする能力。明治期、西洋からの啓蒙主義で盛んに用いられた。

キー・ポイント　下1 認識　認め知ること。物事をはっきり知り、その意義を正しく理解・弁別すること。明治期、哲学や心理学の用語として盛んに用いられた。

下2 奮見する　激しく外に現れる。

下3、　シロテン、白抜き点、批点などと呼ばれ、主に読点と句点の中間の半終止符として、明治二十年代頃によく用いられた。欧文のセミコロンに相当し、ロシア文学の厳密な翻訳を試みていた二葉亭は、創作でも用いた。しかしその後、一般には定着はせず、昭和二十一年、文部省の表記ガイドラインに掲載されたものの、今日でも用例は極めて少ない。

下3 境界　各人をとりまく境遇。境涯。精神・感覚の働きによりもたらされる状態。

下5 放心　心配することをやめること。安心。放念。

下5 世を渡る　生活する。世の中で暮らして行く。世を過ごす。

下8 潮界　互いに異なった性質の海流が接触する境界、あるいは川水と海水の境。物事一般の境界。

下8？　疑問符、クエスチョンマーク。江戸時代後期、蘭学者によって欧文の句読点の研究が始まり、前野良沢は「問点」と訳した。明治期の日本語文に頻繁に用いられ定着した。

キー・ポイント　下8 此危い境を放心して渡ツてゐて　明治期には、「浮雲い」と書いて「あぶない」と読むこともあった。「放心」を「うつかり」と読んでいるが、下5の「放心」とは意味がずれながら同じ漢字を用いることで、お勢の性質の様々な現れ方を示しているか。

キー・ポイント　下11 眠つた本心　ここではお勢の本来の心のあり方を指すと思われるが、文三の期待が込められたお勢の「本心」が仮構されているように読むことができる。

鑑賞

四迷の執筆開始時の意図は、中心点を持てない明治期の近代日本の浮動性を典型的な人物の配置と展開によって批判することにあったとされる。そこには同時代の風俗を巧みに写しながら人間存在の滑稽さを活写したロシアのニコライ・ゴーゴリの影響がある。

「第一篇」では、まさに明治十年代の政治小説の主人公のエリート性を剝奪された内海文三の思い込みを外部から鋭く揶揄する語りが目立ち、式亭三馬などの風刺に適した文体を借用したことが指摘されている。また文三とお勢のやりとりには巌本善治が主宰した「女学雑誌」が代表するロマンティック・ラブ・イデオロギーの影響が見られるものの、お勢の理解が一面的でしかないことがその後の展開で明らかになり、文三のお勢への一方的な崇拝的眼差しも滑稽味を帯びてくる。「第二篇」では、免職後に窮地に追い込まれていく文三と周囲の会話のすれ違い、それぞれの登場人物の性質や心の動きを巧みに示す地の文の語りが、共に三遊亭円朝を参考にしたこなれた言文一致体で表現され、ドストエフスキーのように多声的で緊張感に富んだ言語空間を形作っている。

引用箇所は「第三篇」の最終回にあたる「第十九回」の終わり近くである。お勢との許婚に近い関係性はお政から暗に否定され、お勢からも昇へと魅かれているという決定的な言葉をすでに浴びせられていた。にも拘らず、文三は「妄想」に捉えられるかのように、現在の自分自身の現実を正確に把握できず、まるで下宿先の家父長になったかのような視点から、お勢の今後を案じようとしている。

「第一篇」の頃と比較すれば、文三はお勢の「軽躁」な性質をある程度気付いていることは確かであるが、自分が下宿において父のように「お勢の病」の「境界」に介入し、昇から家族を守る立場にあると誤認している点を、語り手は坦々と示している。ここで重要なのは、現在、お勢が「外」ばかりでなく「内」からの理由で昇に惹きつけられた点を分析するだけでなく、過去において「文三に感染れて」いたことも語り手が明示することである。「お勢の眠つた本心」とは、文三からすれば、昇に傾いたお勢の気持ちを自分へと引き戻すことを暗に含意しているはずだが、そもそも文三へのかつてのお勢の敬意もまた、「感染れ」に過ぎなかったと暴露する。しかし「第一篇」と比べれば、語り手は文三の思考・心情へと寄り添っているように思われる。それはまた、「刺激」「理性」「認識」といった、特に心理学を彷彿とさせる学術的な語彙がお勢の分析に用いることとも関連してくるだろう。「第十九回」の続きでは、文三がかつて学んだ心理学の錯覚をめぐる知識が想起される場面があり、両者が共通の知的基盤に立っていることが仄めかされる。ただし、文三と語り手は、お勢の性質への分析的視座を共有しつつ、お勢と文三自身の現実の関係性をめぐって、その「認識」はずれざるを得ない。

「第三篇」の語り手は、「第一篇」とは大きく異なり、ほぼ文三から見える現象のみに限定して世界を描写し、時に文三の内的独白を模写したような語りも導入するが、文三自身の意識の死角にある不都合な事実も、的確に記述していくのである。語り手

は、いわば文三の「妄想」の生成を正確に記述しながら、文三に何が見えていないのかを指し示す。そしてまた、読者には、どこかで語り手にも見えていない場面を想像する余地を与えていくのである。十川信介「二葉亭四迷論　増補版」（筑摩書房　昭和五十九）、小森陽一「文体としての物語・増補版」（青弓社　平成二十四）、同「構造としての語り・増補版」（青弓社　平成二十九）、ヨコタ村上孝之「二葉亭四迷」（ミネルヴァ書房　平成二十六）が参考になる。

（小澤　純）